

教師の
腕前診断文 | 城ヶ崎滋雄 (千葉県公立学校講師)
イラスト | 吉田朋子

今回のテーマ

所属する集団に応じて
子どもは変わる

Q1

教師はどこに注目しますか。

- ① 楽しそうに歌っている子ども
- ② 声が小さく無表情な子ども

学校には校風があります。自主自律を掲げる学校では主体性を発揮することを求められ、「礼儀正しさ」を重視する学校では規律を重んじらとさせる無形の力が秘められています。つまりそれは、所属する集団によって個人の在り方が決まるといえることです。

クラスづくりのキーパーソンは教師です。教師のものの見方・考え方が雰囲気を作ります。今回は、集団社会化理論をもとにして、「所属する集団に応じて子どもは変わる」というテーマです。

1 同化する

朝の会では「今月の歌」を歌います。口を大きく開けて笑顔で歌う子どももいれば、ほそほそと無表情で歌う子どももいます。

教師は前者のように歌って欲しいと思っています。大きな声で体をスイングしながら歌う姿は楽しそうに見えるだけでなく、見ている側の心もウキウキさせます。

一方で、「ちゃんと歌っていない」「子ども目に入りません。思わず、「もっと大きく口を開けて」と指摘したくなります。一人を注意すると、他の子どもも気になってきます。指導の結果、子どもの歌声は変わります。



②のように教師が物足りないと思つていることに注目するのは仕方がないことです。気になることは変えようと思ひ、理想に近づきたいものです。教師はこれを指導だと思つています。

一方、子どもは叱られた気分になります。教師の指示通りに改めますが、指摘されたからそうしただけで、腑に落ちていくわけではありません。教師の指導は「自分たちが下手だったからだ」と自己肯定感を下げます。歌声が向上しても達成感に乏しく、さらに向上したいという意欲は湧いてきません。

この時、上手に歌っている子どもも一緒に指導されます。本人は気持ちよく歌っていたのですが、教師の指導が自分にも向けられていると勘違いし、意気消沈します。その結果、歌唱のレベルも低下してしまいます。

脳は一般的に主語を理解するのが苦手だとされています。そのため、他者へ発せられた言葉を自分自身に向けられたものとして捉えてしまう傾向があります。

指導の間、教室に緊張感がみなぎり。そして、「苦しい・辛い」というネガティブな感情がクラスを支配します。

また、指導した担任自身もネガティブになります。教師は子どものことを思つて親切心で行つていますが、子どもにプレッシャーをかけているということに気づかないのです。

指導すると、子どもは一時的に変容します。そのことで教師は優位性を感じ、「自分は凄い」と勘違いします。

しかし、教師も子どももどんよりとした気分になり、楽しく歌う雰囲気ではなくなり。その結果、「このクラスは歌が下手」という雰囲気になります。

ではどうするか。①のように頑張っている子どもに注目します。

アメリカの心理学者、ジュディス・リッチ・ハリスの「集団社会化理論」という理論があります。仲間や友人との集団関係の中での経験の影響が、子どもの個性や能力の発達に重要な意味を有するという理論です。

そのプロセスには「同化」「差異化」があります。

「同化」とは個人が所属している集団で重視されているルール・慣習に沿うよう行動することです。個人は所属集団に適応するために自分から積極的にその行動様式や価値観を身につけ、集団との一体化を図ります。同じ集団に所属するメンバーは「みんなと一緒」という連帯意識に基づいた集団行動を経験します。メンバーらしさに適応しようとするのです。

例えば、「このクラスは良いクラスだね」とラベリングされると、それに見合った個人であ

教師の腕前が試される、学級経営のひと工夫。

ベテラン先生によるケーススタディです。

こんな時、あなたならどうしますか？

ろうと自分を律します。最初は良い子を演じているのですが、やがて定着し、本物になります。

もう一つは「差異化」です。一人ひとり違った特徴を持つているという相互認識に基づいた役割分担などの経験です。

絵が上手な個人にポスターを任せる。習字が得意な個人に標語を書いてもらう。ピアノが上手な個人に伴奏を頼むなど、個人の特徴を尊重し、納得した役割分担となります。

同化・差異化の経験が合わさることで、心や行動の発達が促されることとなります。これは家庭では得られない経験です。

ハリスは、親の行動は子どもが大人になったときにもつ心理性に影響を与えることはなく、仲間の行動が影響を与えるといえます。それほど仲間は個人のパーソナリティ形成にとって重要な役割を果たすといえます。

集団社会化理論に今回の事例を当てはめると、教師は「このクラスみんなは楽しそうに歌っているね」と告げます。子どもは「このクラスの一員である以上、上手く歌わなければ」と意識し、同一の行動を取るようになります。個人が集団の価値に同化することで、「歌が上手いクラス」が定着し、それらしく振る舞うようになります。

2 差異化を図る

まだ成長の伸び代があるにもかかわらず、子どもは現状の自分の出来栄を100%だと思っっています。さらなる上達によりクラスの歌声を高めたいものです。

Q2

口を大きく開けて歌っている子どもがいます。差異化をどうやって促しますか。

- ① 名前を黒板に書く
- ② 名前を呼ぶ
- ③ 机間指導しながら「いいね」サインを出す
- ④ 前に出て、フロアーと正対して歌ってもらう

①③は口を大きく開けていることを本人に伝えられます。そのことでさらに大きく口を開けて歌おうとします。個人の歌声のレベルは向上していきます。

ですが残念ながら、それはほかの子どもたちには共有されません。なぜならば、口を大きく開けるという理想のイメージを視覚化できないからです。

そこで有効なのが④です。よく歌えている子どもに前に出てもらい、みんなの方を向いて歌ってもらいます。ほかの子どもはそれを見て自分と比較し、口の開け具合を確認し、自覚することになります。

それは波紋のように広がります。お手本の子どもを見ることで口の開け方について振り返り、それを踏まえて歌うことで歌声の質が高まります。そして、良さを発揮、開発された子どもが増えるという量的な変化が、歌声の質も高めます。量をこなすことで質の向上が促されます。まさに、量質転換の法則です。

全体を变容させるだけではありません。お手本になった子どももさらに向上するのです。自



分はメンバーからどのように見られているのかという評価を得られ、自分の注目度を知ることになります。それに相応しい行動を取ることが集団の中での役割だと自覚し、メンバーからの評価や期待がさらに自分を成長させます。最終的に自己肯定感を高め、主体的な行動を促すこととなります。

みんなのお手本になっているという自負が、さらに大きく口を開けようという向上心へとつながるのです。

互いが刺激し合い、切磋琢磨しながら、クラスの歌声が高まっていきます。

クラスを集団社会化理論によって成長させるキーパーソンは、子どもではありません。それは教師です。教師は何か良いのかを定義して良さの方向性を示し、誰が「リーダー」になり得るのかを知らせることで、クラスを同じ方向に導きます。

教師自身も「良いクラス」の一員であり続けようとしていくのです。